

自分の人生は自分で決定し実現に向けて努力する

<国民学校のレポート>

お話：校長 Ms. Annelise Weng

レポート：ダウニィ真理

★日本人に興味津々

国民学校に着いた私たちは、“こんにちは”という子ども達の笑顔に迎えられた。私たちの訪問の前に先生から日本語の挨拶を教えられたのかと思ったら、子ども達自身が先生に教えてくれと頼んだらしい。

いろいろな年の子が、多分初めて見る大勢の日本人に興味津々、素直な好奇心を見せてくれた。

★自由すぎる！授業

私たちの班は、小学二年生のクラスを見学。週に一回ある英語のクラスだ。子ども達が飽きないためなのか短い時間ずつゲームや歌を交えて簡単な英語の勉強だ。参加型のクラスでみんな楽しそうだ。見ている私たちまで楽しくなる雰囲気だが、正直私の感想は、“自由すぎる！”。ふと気付くと机の下は足元はソックス。みんな、靴を脱いでいる。丸ごとのりんごをかじっている子がいる。

“えーっ、授業中に食べて叱られないの？”と驚いたが、その子はビンゴゲームで英語がまだ読めないらしい隣の子に教えていると、先生から“お友達を助けて偉い！”とほめられていた。



★自分の役割を把握する子どもたち

一見自由に歩き回っているように見えたが、子ども達はちゃんと自分の役割を把握して、ちゃんとしたタイミングでこなすのだ。一言も先生に指示されていないのに。驚いた！なんと自由で、なんとしっかりと責任を果たしているのだろう。

感心しながらも別の疑問が頭をよぎる。“楽しそうだけど、こんなんじゃ勉強が身に付くの？テストではちゃんと出来るのかしら？”聞くとところによると、デンマークの国民学校では7年生までテストがないと言う。しかし世界的に見ても学力水準は高い。同じクラスメイトと同じ担任の先生で9年間持ち上がる。

★日本の小学校とは随分違う

長い目で成長してよいということなのか。教育の方針として、人との競争はなく自分の成長に重きを置く。

どちらが良いと簡単に言えないが、私が経験した日本の小学校とは随分違う。日本の学校は先生の言う事、やり方が絶対だった。我

が母親は、“子どもを人質に取られているようだ”と表現していた。暗記をする事が多かった。私にとっての勉強はテストで良い点を取るための勉強だった。仮に理解出来なくても興味が無くても、テストのために一夜漬けで覚えた。そんな事をやっけて、私は 11 才で燃え尽きて、登校拒否や親への反抗をした。気づいたら朝起きると緊張でお腹が痛くなり学校に行けなくなっていた。

★日本には日本の良さが十分にある

しかし、デンマークの学校は先生をファーストネームで呼ぶから真の平等とも言えないだろう。日本には日本の良さが十分にある。先生や目上の者を尊ぶ文化は美しいと思うし、自分のたてた目標に向かって頑張る“根性”も大切な資質である。自分の頭と心で考え、自分の考えを言葉で人に伝える練習を子どもの時からもっとしていけば、知識を実現出来る人間に育って行くだろう。

★何事も基本が肝心

また余談であるが、私の住んでいるアメリカではこんなシステムがある。子どもが小学校低学年の頃クラスのモリーちゃんは一年生の時に留年したから一才年上なんだと言う。“エーッ、小学校で留年”と驚いた私。日本では、高校や大学では聞くけれど。でも、実は基礎の読み書きや算数をしっかり理解して上の学年に上がるのは理屈に合うのだ。何事も基本が肝心。現にこのモリーちゃん、中学高校と進んでずっと優秀な生徒だった。小さい時で本人もまわりの子達も気にしていなかった

し、わからないまま進んでいくよりずっと良いやり方だと思う。



★自由と責任

デンマークで思ったことは、国民の求める生き方、ひいては国全体の方針が学校の教育のあり方を決めているということだ。自分の人生は自分で決定し実現に向けて努力する。自由と責任。このふたつはセットだ。自分の生き方に責任を持つ。逆に言えば選択の自由が無いところでは、人や社会のせいにする風潮がはびこり、大人になっても自分の人生に責任を持ってない人が育つ危険がある。まわりと協調しながらも自分の人生を納得を持って生きたいものだ。社会全体が変わるには時間を有するが、人間死ぬまで変わるチャンスはあると信じている。

